

お茶の間学Ⅱ

生活特報部 FAX 092 (711) 9056 メール seikatsu@nishinippon-np.jp

2005年6月に募集を始め、2カ月後に締め切った第1回「『新・木造の家』設計コンペ」には全国の10大学から10組の応募がありました。

第1回ということもあり、書類審査は実施せず、10組20人余りの応募者全員を佐賀に招待しました。プレゼンテーション審査の結果、最優秀賞に選ばれたのは、法政大学大学院の栗原悠紀君でした。

彼の提案した住宅は、障子やふすまなどの取り外し可能な建具で部屋を間仕切りし、用途や家族構成の変化に応じて部屋の大きさを換え、使い方を変える

もり 森林をつくらう 脊振の地から

10 佐藤和歌子

10大学から10組応募

というもの。そして、この提案に佐賀県武雄市の前田さん一家が施主として応じてくださり、住宅を施工し完成するまでの約1年間、彼は私と一緒に木材のことから木造の職人技術まで学ぶ時間を過ごしました。

生まれた時からマンションで生活していた栗原君。彼が木造住宅の設計士を目指したきっかけは、子どものころ、たまたま訪れた木造の家が真夏だというのにひんやりといて心地よく、風が通り抜ける快適な空間

だったことに魅了されたからだそうです。「大人になったらこんな家に住みたい」と思い、大学に進学。でも、私の弟と同様、大学ではなかなか木造の勉強をする機会がないことに悩んでいた折、私たちのコンペのポスターが目に入り、応募したのでした。都会育ちの彼と話をしていた驚いたのは、香りの感覚です。木に囲まれて暮らしてきた私にとっては、化学物質の鼻を突く臭いとしか思えなかったものが、彼には「新築の香り」だったそうなのです。

彼いわく「都会に暮らしていると、大体新しい建物はこんな香りがするから、当たり前だと思っていました」。木造住宅の特徴である穏やかな木の香りや肌触りも知らない世界に暮らしていることに、ただただ驚きました。



施主と打ち合わせする栗原悠紀さん(右)

「一方、「障子やふすまは日本の気候に合っているだけでなく、家族がどこにいて何をしているかが何となく感じられる長所があるんですよ」とも。都市部でマンション暮らしをしてきた彼が、住宅にプライバシーばかりを求めるのではなく、家族のだんらんや絆を絶やさない工夫を取り入れる大切さを考えている。

一方的にこちらの思いだけで考えている判断を間違っし、やはり生の声を聞く大切さをあらためて感じました。

(NPO法人「森林をつくらう」理事長、佐賀県神埼市)